談
話
室

日本生物物理学会第45回年会報告
生物物理若手奨励賞
—第3回選考経過報告—

美宅成樹¹, 石森浩一郎²

¹平成18・19年度生物物理学会会長 / 名古屋大学大学院工学研究科

²平成18・19年度生物物理学会副会長・若手奨励賞担当 / 北海道大学大学院理学研究院

1. 第3回生物物理若手奨励賞について(美宅)

歓声の中、賞状を渡されたときの若手研究者の顔は輝いています。会長として、若手賞の授与式を2回経験しましたが、若い研究者の輝いた顔はよいものです。輝いた顔を見ていると、生物物理学会の将来を約束してくれるものという確信が湧いてきます。若手賞も3年目となり、いろいろな疑問点・反省点が浮かび上がってきています。毎年、評価のために10人の若手研究者に口頭発表を行ってもらい、5人の受賞者を決めます。毎年、10人もの人を選んでいくと次第に応募者がなくなっていくのではないだろうか？ なくなることはなくても、質が落ちてくるのではないか？ というのが疑問の1つです。生物物理学会の会員数は約3500名です。その中の若手（たとえば35歳以下）の人の人数は正確にはわかりませんが、数百人いることは間違いありません。そして、年間100人以上の若手が入会してきているので、質の高い若手賞を維持できることは難しいことではないと私は考えています。問題は、よい研究を行っている若手研究者に積極的に応募してもらえるかどうかということです。今後の審査委員会、運営委員会に広報の努力をお願いしたいと思います。

応募を遠慮している人がまだまだたくさんいるということを感じさせる事実が1つあります。3年間の若手賞の歴史の中で、2007年にはじめて女性の受賞者が出ました。このことは応募者の中での女性研究者の割合が少ないことによっています。生物物理学会の場

合、若手の女性研究生の割合が20%近いはずですが、しかし、応募者の割合は10%を割っています。それに伴って受賞者の割合が非常に少ないのです。ポスターセッションなどで、若い女性の研究に注目してみると、なかなかよい研究が多く見られます。遠慮しないで女性の若手が応募していただければ、若手賞の質の向上にもつながると思うのです。

石渡会長のときに始まった若手賞がさらに生物物理学会の発展につながっていくことを期待しています。

2. 第1次審査(石森)

本年度も、昨年同様、年会への発表申し込みと同時に若手奨励賞の応募を締め切りましたが、意外にも当初の締切日(7月20日)直前になっても会長室に届いた応募書類は昨年度よりも少なく、20名にも届きませんでした。前回までの若手奨励賞受賞者のレベルの高さに敬遠されてしまったのでしょうか。さらに、応募者の所属機関や専門分野も大きく偏っており、地域や分野によっては若手奨励賞について周知されておらず、幅広い生物物理学会の実情を反映していないことも考えられました。そこで、年会の発表申し込み締め切りが延長されたのに合わせて、各運営委員や支部長に候補者推薦の依頼状を出したところ、最終的な締切日である7月27日には昨年の応募者の2倍近い56名もの応募者となりました。地域的にも、残念ながら東北地区からの応募者はなかったものの、それ以外の地域からは少なくとも2名、会員数の多い関東、中部、近畿地区からは10名以上の応募があり、分野

Early Research in Biophysics Award—Report on the Third Award Selection Process—

Shigeki MITAKU¹ and Koichiro ISHIMORI²

¹Department of Applied Physics, Graduate School of Engineering, Nagoya University

²Division of Chemistry, Faculty of Science, Hokkaido University

としても応募の際に申告する11の分野区分すべてへの応募がありました。また、昨年度も問題となった女性研究者の応募ですが、氏名で判断する限り今回は8名の応募があり、昨年に比べ大幅に増加しました(といっても、会員比率から比べればまだまだ少ない状況ですが)。さらに、後から到着した応募者の研究内容もレベルが高く、決して無理して数合わせのために提出されたものではなく、むしろ、自らの研究に対する評価が厳しいのか、奨励賞に応募することを躊躇していた人が多いような印象を受けました。自信過剰気味でも許されるのが若手研究者の特権でもあるので、もっと積極的に応募をしていただくとともに、有望な若手研究者の周囲の研究者も、ぜひその背中を押していただければと思います。

応募者確定後、その専門分野を考慮して、第1次審査員として宇高恵子、高橋聡、徳永万喜洋、野地博行、倭剛久の5名を選任し、学会での担当である石森浩一郎を含めて6名で書面審査を行いました。本年度は、昨年度の評価基準を元に、以下の点を考慮してその審査を行いました。

- (1) 全員の応募者について少なくとも2名の審査員が評価をする。ただし、応募者の研究における共同研究者などで公平な審査ができないと判断される審査員は、当該の応募者の審査はしない。
- (2) 2名以上の審査員から「推薦」の評価を得た応募者を「第一段推薦者」とする。
- (3) 「第一段推薦者」について全審査員が評価を行い、「第二段推薦者」として10名を推薦する。
- (4) 「第二段推薦者」の中から推薦審査員の数の多いものから上位10名を「若手賞招待講演最終候補者」とする。
- (5) 「若手賞招待講演最終候補者」の分野などを審査員全員で確認したのち、「若手賞招待講演者」として決定する。

昨年同様、この1次審査では、発表内容に止まらず、これまでの業績、出身研究室、分野等について幅広く審査の対象としたため、その選考は困難をきわめました。特に、予稿集原稿の締め切り日の関係で日程的には余裕のない中、1次審査員の方々は精力的にかつ慎重に審査いただきました。意見が分かれた場合には別の審査員の意見を聞くなどして、慎重に選考を進めた結果、まず2名以上の審査員が推薦した「第一段推薦者」として20名の応募者を選定しました。次いで、その中から10名の「第二段推薦者」を各審査員に推薦いただき、推薦者の多い順から上位10名を「若手賞招待講演最終候補者」として選び

ました。最後にこの「若手賞招待講演最終候補者」の方の専門分野を検討し、大きな偏りはないという判断をもって、予稿集原稿締切日ぎりぎりになってようやく10名の「若手賞招待講演者」を選ぶことができました。このような選考経過ですので、本年度も昨年同様、この10名の方は間違いなく優れた若手研究者であると自負しております。また、今回、審査員が特に意識することなく、女性研究者と博士課程院生、それぞれ1名ずつが招待講演者に選ばれましたが、これは生物物理学会での女性研究者や大学院生の研究水準の高さを明確に示した好例の1つだと思います。来年度も多くの女性研究者や大学院生がこの若手奨励賞に挑戦していただけることを期待しております。

一方で、大変優れた研究と認められるにもかかわらず、残念にも選ぶことができなかった多くの応募者の方々については、さらにこれからの1年で研究を発展させて、ぜひ来年度もこの若手奨励賞に応募いただくことを期待します。2年続けて審査に携わっていますが、昨年応募され、惜しくも書面審査で選ばれなかった人の多くが今年度応募されてはいない状況をたいへん残念に思います。

今回、結局56人のすべての応募書類に目を通し、20名近くの候補者の審査をすることになりましたが、このような書面審査をしていると、それほど多くはない応募書類の文章の中からも、それぞれの研究者の研究に対する情熱や想いというのが感じられる場合が数多くありました。そして、それは新鮮な印象を与えるものが多く、確かに研究時間を費やして人の研究の評価をするということは負担ではありますが、この審査を通じて若手研究者のエネルギーを感じることができ、彼らから何となく元気をもらったような気がします。来年度も読む人に元気を与えるようなエネルギーに満ち溢れた応募書類が次々と出てくることを期待します。

3. 第2次審査(石森)

第2次審査の審査員と審査方法については、これまでの選考方法の反省に基づき、学会内の担当である男女共同参画・若手問題検討委員会で議論を重ね、本年度は以下の点を第2次審査員選任の基準としました。

- (1) 若手奨励賞の水準を確立するため、前年までの継続性を考慮する。ただし、連続3年の選任は避ける。
- (2) 招待講演者の発表する研究についての共同研究者は除く。

- (3) 若手奨励賞選考は生物物理学会にとって重要な事業であるという認識から、生物物理学会の現会長を含め、その執行部運営委員、あるいはその経験者から何名かを選定する。
- (4) 1次審査結果を反映させるため、1次審査員からも選定する。

以上の方針と候補者の専門分野を考え、さらに第1次審査委員が中堅の研究者中心であることから、第2次審査委員としてはより大所高所からの判断が可能なシニアな研究者の方を中心に、阿久津秀雄、宇高恵子、神取秀樹、曾我部正博、寺嶋正秀、豊島陽子、中村春木、難波啓一、美宅成樹の各氏にお願いし、学会での担当者である石森浩一郎を含め、計10名の第2次審査委員が評価を行うこととしました。

また、2次審査の評価基準として、以下の点を考慮しました。

- (1) 研究成果そのものだけではなく、発表者がどの程度その研究に対して寄与しているのか。単なる教員や先輩の研究の延長ではなく、自らの発想や独創性が生かされているか。
- (2) 将来、生物物理学の分野をリードできるような発展性が感じられるか。
- (3) プレゼンテーションについては、その話し方の優劣よりはむしろスライドなどにその人なりの工夫等が感じられるかどうか。
- (4) 最終的には生物物理学会を構成する会員の研究分野とのバランスも考慮する。

さて、その第2次選考会は、12月21日(金)午後1時10分から開催され、昨年同様、立ち見の聴衆も多数出るなか、若手招待講演者10名の講演が行われました。若手奨励賞選考も3年目に入り、今までの第2次選考会での講演を聞いてきた人が多いためか、専門外の聴衆にもわかりやすく、その研究の意義や自らの寄与を明確に話すことのできた講演者が多かったように思えました。本年度もこれまでの招待講演と同様、いずれの候補者も高い研究レベルの発表で、随所に講演者の創意工夫や独創的な発想が感じ取れ、招待講演者としてふさわしい聴きごたえのある講演が続いたように思います。講演会終了後、2次審査員が別室に集まり、昨年度と同様な評価方法で各講演者の評価を行い、奨励賞受賞者の選定を行ないました。今回もレベルの高い発表ばかりであり、この10人から5人を選ぶのは容易ではないというのが審査員一同の正直な感想ではあるものの、講演時の評価の得点順に候補者の順位付けを行うこととしました。今回も5位に同得点の候補者が2名並ぶ激戦となり、この2名の分野

などを検討の上、決選投票を行なうことで、ようやく5名の受賞者を決定することができました。昨年度も強調したことですが、今回惜しくも選ばれなかった招待講演者についても、その発表内容のレベルは高く、実質的には受賞者と同等であると考えてもよいと思います。

授賞式は12月22日の懇親会の際に行われ、600名以上の参加者が注目する中、まず10名の招待講演者が1人ずつその名をよばれて壇上に上がり、今年度から招待講演者に授与されることとなった「若手招待講演証」が美宅会長より手渡されました。次いで、若手奨励賞受賞者の氏名が発表され、一瞬の沈黙、その後大きな拍手、喝采、祝福の声が繰り返される、いつもの光景が再現されました。受賞者からは周囲の研究者への感謝の言葉や今後の研究に対する抱負や情熱が語られ、大きな拍手とともに授賞式は終了しました。毎年のことではありますが、この若手奨励賞の授賞式を通じて、生物物理学会が若いエネルギーに満ちており、学会の新たな展開はこの若いエネルギーによって実現されるであろうことを強く印象付けられます。ぜひ、来年度も多くの優秀な若手研究者がこの若手奨励賞に応募することで、この若いエネルギーが持続することを期待します。

招待講演者および若手奨励賞受賞者(*印)(所属は応募時)

* 秋山修志 (JST さきがけ, 理研・播磨)

「リアルタイム X 線小角散乱でみたシアノバクテリア時計蛋白質の離合集散ダイナミクス」

* 今村博臣 (阪大・産研)

「細胞内 ATP を蛍光で可視化する」

木下雅仁 (阪大・蛋白質研)

「蛋白質の折り畳み運動を観測するための一分子測定手法の開発」

* 小池亮太郎 (東工大・学術国際情報センター)

「確率的アライメントによるプロファイルプロファイル法の性能向上」

小森靖則 (阪大・院生命機能)

「ミオシン V の 36 nm ステップに伴う 2 つの 90° 回転」

* 定本久世 (徳島文理大・香川薬)

「一細胞レベルにおける学習・記憶形成に関わる分子機構解析」

深川暁宏 (遺伝研)

「1 分子計測および MD シミュレーションによるタンパク質アンフォールディングの確率的経路と複数の中間状態の検出」

* 矢島潤一郎（学習院大）

「単頭キネシンによる微小管の並進・回転運動機構の研究」

山下高廣（京大・院理）

「代謝型グルタミン酸受容体のヘリックス II 及び IV を介した分子内構造変化伝達」

山本竜也（理研・播磨）

「H/D 交換と質量分析法による 70S リボソーム蛋白質ダイナミクスの Mg^{2+} 濃度依存性解析」

小池亮太郎氏

招待講演者

定本久世氏

若手奨励賞受賞者

秋山修志氏

矢島潤一郎氏

謝辞

授賞式の写真は、横浜年会実行委員会の栗栖源嗣氏からご提供いただいたものです。

今村博臣氏

美宅成樹（みたく しげき）

名古屋大学大学院工学研究科教授

連絡先: 〒 464-8603 愛知県名古屋市千種区不老町

E-mail: mitaku@bp.nuap.nagoya-u.ac.jp

URL: <http://bp.nuap.nagoya-u.ac.jp/>

石森浩一郎（いしもり こういちろう）

北海道大学大学院理学研究院教授

連絡先: 〒 060-0810 北海道札幌市北区北 10 条西 8 丁目

E-mail: koichiro@sci.hokudai.ac.jp

URL: <http://barato.sci.hokudai.ac.jp/~stchem/>